
マスカレードに異常なし！？ 第2話 行商人シェリー

水鏡樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マスカーレイドに異常なし！？ 第2話 行商人シェリー

【Nコード】

N5955A

【作者名】

水鏡樹

【あらすじ】

マスカーレイドという、小さな街。ウォルガレンの滝という巨大で美しい滝に魅せられた人々が開拓した街だった。そんなマスカーレイドに住む個性的な人たちの物語。第2話は行商人でありトラブルメーカーでもシェリーが来訪し、マスカーレイドの面々との再会をする。マスカーレイドの人々にもたらされるのは幸か不幸か！？

その1：シェリーの来訪

「ひーさしぶりーね。なんにもかわつてーないみたいー」

独特の口調でばやきながらマスカーレイドに近づいてきたのは、荷物を大量に載せてギシギシときしむ幌馬車の御者だった。

栗色の長い髪とこざっぱりした顔を持つ女性で、服装は地味な麻製の服。胸には身分証明書の代わりとなる商人専用のバッチが、キラキラと太陽の光を反射させている。

「みんな、こころーまちにしてるだーろうなー」

ほくそえみながら女性は、マスカーレイドの入り口で通行証を自警団員に提示した。

マスカーレイドの自警団員は、白地に黒で染められたカズラに、黄色の十字架がかたどられた制服を着ていた。街を歩いていれば間違はなく目立つ存在になる。

「シェ、シェリー！？まさかあの行商人シェリーさんですか!？」

通行証を確認すると、青年は派手に狼狽していた。シェリーの顔を確認しては、通行証の顔と何度も見比べている。

「そうでーすが、なにーかー問題ーでも?」

「し、しばらくお待ちください」

通行証を持ったまま、事務所らしき建物へと入っていく。

入れ替わりで出てきたのは、先ほどとは違う壮年の自警団員。正確には団長だ。だった。シェリーの姿と身分証を確認し、蓄えた白ひげをなでる。

するどい視線がシェリーをつきさしてくる。だが、シェリーはまったく気がついていないようだ。

「おおー、ノルンさんじゃーないでーすか、元気でしーたかー」

「また来たのかシェリー。あまり問題を起こすなよ」

「失礼でーす。アイテームは遣うー人の心ーによってー、幸にーも不幸にーも繋がるーんですー。問題をおこーしてるのーは、ぼーく

「じゃな～いです」

「間接的にシェリーが起こしてるんだから、悪いのはシェリーだ」

「ひど～いです。ぼくがな～にをしたって～いうんで～すか！」

「もついい。あまり騒ぎになるものを売るんじゃないぞ」

預かっていた通行証をシェリーに返すと、

「納得いか～ないけど、まあ～いい～や」

「ぼやきつつ手綱を動かし、鼻歌を歌いながらシェリーはマスカーレイド内へと消えていった。

「おいっ、ハリアー！」

シェリーを見送った後、ノルンは事務所に声をかける。

中から出てきたのは、最初にシェリーから通行証を受け取った青年だった。

二十代後半程度の金髪の青年は、いくつもある自警団の第七部隊長を務めていた。

王都では数年の間、警備員を勤めた経験があった。その実績を買われ最近マスカーレイドへと配属されたのである。

「はっ、どうなさいました団長！」

「お前たちの部隊、今日の仕事はすべてキャンセルだ」

「と、いいますと？」

わざとらしく首をかしげるハリアーの頭を、軽くはたく。

「シェリーを見張っとけ。騒ぎが起こりそうになったらこちらに一人連絡をよこして、残りは鎮圧に全力を注げ」

「ま、まじですか？ 勘弁してくださいよ！ この間は家が三軒爆発したらしいじゃないですか！ そんなのおれ達みたいな結成間もない部隊が鎮圧できるわけないですって！」

「なにごと経験だ。通行証の確認はおれたちでやっておく」

頷きながら話を完結させようとするノルンを、ハリアーが肘で突つつく。

「もしかして、団長も怖いんじゃないですか？」

「さっさと行け！」

お尻を蹴り上げられ、ハリアーは数人と共にシェリーの後を追っていった。

その2：クネス来店

マスカーレイド中央にある食堂『オートエーガン』の隣には、木々に囲まれたただっ広い空き地が広がっている。そこは商人協会主催のフリーマーケットが連日開催されていた。

商人として登録してあれば、だれでも店を開くことができる。主要都市の中継地点であるマスカーレイドでは、別の都市に行く途中でここに立ち寄り、小銭を稼いでいく商人も少なくないのだ。

もちろん、小銭どころか大金を稼いで帰る商人もわずかにいる。シェリーはそのわずかなメンバーの一人だった。

「こゝんにちは、またきたよ」

マスカーレイドの人々に声をかけると、半分の人は喚起の声を上げる。残りの半分は軽い会釈と共に、脱兎のごとくシェリーから離れていった。

「このへゝんで、いいかな」

空き地のすみに、初めは小さいビニルシートを敷く。

幌馬車の中から年季の入ったラッパを取り出すと、シェリーは気合を入れて鳴らした。

『パッパッパ！ パッパッパッパ！ パッパッパッパ』

あまり広くはないマスカーレイドには、これだけで十分に響き渡る。

そしてマスカーレイドの住人は、この音がシェリー来訪の知らせだと分かっている。空

き地に違う店を開こうとしていた商人もだ。

「シェリーが来てるみたいだぜ！」

「本当だ！」

「おれ、会うの初めてだよ！」

商人たちが口々に噂を漏らし、自分達の店を畳んでいく。
なぜなら、シェリーの店の商品は希少価値の高いものが多い。商人たちも客として商品

を購入し、他の街で売った方がはるかに儲かるのだ。

「さゝて、本格的に、店を広げようかな」

全ての店が閉店し広い空き地にシェリーの店だけが残ると、シェリーは幌馬車を中央へと持っていった。

網の目のような道を残した状態で、空き地一杯にビニールシートと商品を並べていく。

空き地には商人だけでなく、マスカーレイドの人々もちらほらと姿を見せ始めた。

最後に自分の両脇に大きなつぼを置くと、シェリーはもう一度ラッパを鳴らした。

『パーパラパッパッパ！ パーパラパッパッパ！』

二度目のラッパは開店の合図。ラッパの音が収まると共に、お客さんは一斉にシェリー

のお店と化した空き地へと入ってきた。

「さゝあ、いらっしやうい。他々では手にはいらないうものばっかりだよ」

シェリーの提言どおり、店内には見たことのないようなものばかり。もしくはみたこ

とはあってもまったく使い勝手の違うものだった。

U字型に曲がり両側に花を生けられる花瓶、取っ手が両側についているコップ、塩など

を入れる入れ物も、中には火薬が入っていたりする。

シェリーの売り物には値段は書いてあっても、商品についての説明などない。買った人

が自分で判断し、自分で使いやすいように使う。

それが商品にとってもお客さんにとっても、一番大切だとシェリーは考えていた。

「やあシェリー、元気だった？」

「あ、クネゝスさん、おひさゝしぶりゝ」

お客さんがまだ商品を吟味している段階で、様子を見に来た小説家クネスがシェリーに

声をかけた。シェリーは手を振りつつクネスを招き入れる。

「前にゝ買ったペンはゝどうゝでしたゝ？」

「ああ、考えたイメージが文章にできるっていうペンだね。いまいちだったかな？」

「そうでゝしたか。しょうせゝつをゝかいてゝるクネゝスさんには、ぴゝったりだとおもったゝんですが」

首をかしげるシェリーに、クネスは両手を軽くあげる。

「イメージの隙間に入り込んだ、ちよつとした思考も文章になつちやうからね。おなかす

いたな……とか」

「そうでゝす、それでゝもいいとゝおもいますゝけど？」

「悪くはないけど、やっぱり自分で推考を繰り返した方がいい文章が出来ると思うからね。

それが小説を書いている自分の楽しみでもあるし」

まだ首をかしげているシェリーの肩を、ポンと叩く。

「シェリーが商人をやっても、他の人には分かってもらえない楽しみとかあるんじゃない

い？ いい商品を見つけたときとか、お客さんに喜んでもらったりとか」

「それはゝもちろゝんですゝ」

「小説も同じさ、自分で考えに考えを重ねた文章で作品を作り上げるのが、他の人には分

かってもらえなくてもぼくにとっては楽しいんだ」

「わかる気ゝがしますゝ」

にっこりと微笑みながらシェリーは、今日初めてのお客さんから料金をいただいていた。

受け取ったお金はすべて右手のそばにある壺へと入れていく。

「ところでいつも気になってたんだけど、万引きとか大丈夫なの？」

「まんびゝきですかゝ？ だいじょゝぶですゝす。彼らがゝつかまゝえてくれまゝす」

言いながら左手の壺に手をかける。そこからピヨンと出てきたのは、身長二十センチほどの小人だった。

「ちようどゝ、だれかがゝまんびゝきしたゝみたいですゝ」

その3：フランカー一家撃退

一人、また一人とつぼの中から出てきた小人は、全員同じ方向へと走っていった。

しばらくすると、遠くから『いてて……』や『はなせ！』などの声が、シェリーのほうへと近づいてきていた。

声の主はすぐさまシェリーの前へと連れ出された。男二人組みのごろつきで、一人は瘦せたのっぽ、一人は太ったチビ。同じようなあごひげを生やし、同じように右目に眼帯をつけていた。

二人を苦しめていたのは、先ほど出てきた小人の集団だった、髪を引っ張ったり手に噛み付いたり。

男たちの手には、店の値札がついたままの指輪やネックレスなど多数を所持していた。

「まゝんびきはだめですよ、商品をくかえ〜して下さ〜い！でないと〜ひどいめに〜あいますよ！」

「うるせえ！こんな小人ぐらいでやられると思ってんのか！おれたちやフランカー一家だぞ！」

「少しぐらいくれても罰は当たらないザマス！」

わけのわからない理屈とでかい態度で、フランカー一家と名乗る二人は反省の色すら見

せなかった。もちろんシェリーの商品を手放そうともしない。

「知らな〜いですよ？ どうなっただ〜って〜」

懐からシェリーが取り出したのは、小さな金属製のスティックだった。

「けつ、そんなスティックでなにができるってんだ！」

「馬鹿にするにもほどがあるザマス！」

笑い飛ばす二人にシェリーは大した反応を見せず、小人の出てきた壺をスティックで一

度たたいた。とたんに小人たちの攻撃が止まる。

「なんだなんだ、諦めたのなら最初から言えっての！」

「ありがたうございましたいくザマス！」

手を振りながら立ち去っていく二人。シェリーは薄っすらと笑みを浮かべて、もう一度壺をスティックでたたいた。

「あひや、あひやひやひや！」

突然ノツポの男が、体をちぢ込ませながら尻餅をついた。そのま

ま体をくねらせながら、

地面を転がりもだえ苦しんでいる。

「ど、どうしたザマスか！ あひ、ひやひやひやひや！」

太った男も同じような反応を見せ、二人してシェリーの店と化した空き地を転げ回った。

なにも知らないクネスが近づいていくと、理由はすぐさま判明した。先ほどまで攻撃を

していた小人が今度はくすぐり攻撃を始めていたのだ。

「しゝらなゝいですよゝ、笑い死にゝしたゝって」

転がる二人を見下ろしながら、勝ち誇ったように腕を組むシェリー。

「て、てめえ！ おれたちを殺したら商人免許剥奪されるぞ！」

「ぼゝく、なにもしてゝないゝもゝん」

両手を軽く上向かせ、シェリーはせせら笑った。いつのまにか周りにはお客さんが集中

しており、転がっているフランカー一家を指差して笑ったり、写真を撮ったり 常連の

間では、小人の捕り物は名物になっているのだ。

「くそつ、覚えてやがれ！」

「次は痛い目にあわせてやるザマス！」

フランカー一家が盗んでいた商品を捨てると、小人はすぐさま二人から離れた。

用事が済むと、小人は壺へと戻っていった。お客さんの温かい拍手を背にして。

「またの〴〵ご来店〴〵、おま〴〵ちしてま〴〵す！」

フランカー一家が走り去っていくと、シェリーは元いた壺のそばへと引き返した。

「さあ〴〵、どんどん買っ〴〵て〴〵くださ〴〵いね！」

周りに集まっていたお客さんは、すでに興味の対象をシェリーの商品へと戻していく。

シェリーのそばには小人の壺を観察しながら、何度もうなずくクネスだけになっていた。

「なるほど、万引き犯は小人が捕まえてくれるのか。面白いマジックアイテムだね」

「ぼく〴〵の両親か〴〵ら受け〴〵つがれた、大事な〴〵宝物〴〵です〴〵。これだけ〴〵はいくら〴〵お

金をつまれ〴〵ても譲れないんです」

「先祖代々の壺ってわけか。なんかいいアイデアが浮かんできそうだ。それじゃあシェリ

ー、また次の機会にね！」

「はい。まいど〴〵ありがと〴〵ござ〴〵いました！」

クネスはシェリーに軽く手を振ると、そのまま空き地を後にしていった。

その4：オートエーガンで昼食を

正午を少し回った頃、シェリーの店も一段落ついていた。めぼしい商品を購入した商人

たちはすでに姿を消しており、マスカーレイドの住民が十人前後、ぶらぶらと商品を観察

している程度だ。

「おゝなか、すいたゝな。オートエーガンで昼食とゝらなきや」
苦情の声を上げるおなかを押さえつつ、シェリーは近場にいた男に声をかけた。

「すみませ〜ん、その若い〜おとこのひと」

「フツ、ぼくですか？ 美しい女性に声をかけられるとは光栄だ」

シェリーが声をかけた男とは反対の方向から、髪をかきあげながら現れたのはマックス

だった。普段よりも容姿に気合を入れているのか、虹色の派手なジャケットに身を包んで

いる。

「あつ、マック〜スじゃない。ひさし〜ぶり〜」

「やあシェリー。今日も一段と綺麗だね。見違えたよ」

「きどつて〜も、まったく似合って〜ないで〜すよ」

がつくりうなだれるマックスの反応に、シェリーはケラケラと笑い声を上げた。

「でも、ちょうど〜よかったです〜。マック〜スなら〜信用でき〜るし〜」

「へっ、なんか用なの？」

シェリーが声をかけた意図をまったく把握していなかったマックスは、突然のお願いに

面食らっていた。かまわずシェリーは頭を下げる。

「一時間〜ぐらい、店番し〜てもらえ〜ませんか〜？ 商品〜には

全部、値札がついて

ますから」

「うーん、どうしようかな？　これからデートの約束が三件ほど…」

…」

「見栄はなくてもいいですから、よろしくおねがいますね」

「あ、ちよつとシェリー、待てて！」

後ろから聞こえるマックスの声を振り切り、シェリーはオートエーガンへと向かって走り去った。

「こんくにちは」

「いらつしゃいシェリー、そろそろ来る頃だと思ってたわ」

店内に入ったシェリーを迎えたのは、テーブルに料理を運んでいる二才だった。袖をま

くった両手にポニーテールの髪型。前に来た時とまったく変わっていない。

「あいかわらず、いそがしそうだね」

「そうでもないよ。最近は腕のいいウエイトレスを雇ったからね！」

言われてシェリーが周りを見渡すと、確かにウエイトレスらしき赤髪の女性が一人、も

う一つのテーブルで注文をとっていた。

ただ、体格などを考慮するとウエイトレスとは程遠かった。むしろモンスターでも相手

に戦っているほうが似合いそうだ。

それもそのはず、彼女は少し前まで傭兵として仕事をしていた。諸事情により傭兵とし

ての信用を失ったため、いまはオートエーガンのウエイトレスをしているのだ。

「シェラフィールっていうの。みんなはシェラって呼んでるけどね」「へえ、オートエーガンって、ウエイトレスを雇うほど」

儲かってゝたんだ」

「あのねえ……」

目頭を押さえている二オのそばを通り、シェリーはシェラの元へと向かった。

ちょうど注文をとり終わったシェラはシェリーの存在に気づき、「いらつしやいませ、空いているお席へどうぞ！」

笑顔で応対する。どうやらウエイトレスという職業もまんざらではないらしい。

「こんにちは、シェーラさん」

「えっ、わたしの名前……」

シェラの疑問はそばまで来ていた二オの笑顔であっさりと解明していた。

「ぼくは行商人のシェリーです。今後ともヨロシク」
シェリーが右手を差し出すと、シェラも慌てて右手を出した。

「こちらこそよろしく、シェリー！」

握手をしたシェラの手に、シェリーの肌とは別に軟らかい絹の感触。

手を開くと、中には奇抜な彩色でかたどられたお守りが入っていた。

「これって……」

「お近づきのしるしに、東方で手に入れ、恋愛のおまもりです。シェラ

さんで、恋してるでしょ？」

頬を瞬時に真っ赤に染めたシェラは、二オをかるくにらみつけた。一方二オは首を横に

振り、シェリーにそこまでは話していないと身振り手振りでアピールする。

「だいたいい、わかるんですよ。いろんな人、みてきますから」

ニッコリと微笑んで、シェリーはカウンターの席へと座った。

「いつもの～お願いしま～す」

「オッケー、シェリー専用A Bランチね！」

二才はシェリーにウインクすると、裏のキッチンへと消えていった。

シェリー専用A Bランチとは、基本的にAランチとBランチ両方を頼んだ時と変わらな

い。ただ、ご飯や漬物だけはランチ一つ分なのだ。

「おまたせ、シェリー専用A Bランチよ！」

キッチンに入っただばかりの二才が、すぐさまシェリーに注文された品を持ってきていた。

立ち上る湯気に乗って、具材から存分に引き出された香りが漂ってくる。

「早かった～ですね」

「来る頃だと思ってたって、言ったでしょ？ もうほとんど完成してたってわけ。ごゆっくりどうぞ！」

普段置くはずの伝票は置かずに、二才はキッチンへと引っ込んでいった。

「では、いただきます！」

シェリーは空腹を満たすため、口調とは正反対の素早さで食事に取り掛かっていた。

その5：マックスへのお礼

数分後、早くもシェリーは食事を終えていた。

「ごちそうさ〜までし〜た！」

両手を合わせて軽くおじぎすると、裏から二才が姿をみせていた。
「おそまつさま！ おいしかった？」

二才は段ボール箱一杯のニンジンを抱きかかえており、シェリーの傍らへとゆっくり下ろす。

「もちろんです。ここの〜料理〜を食べると、マスカーレイドに〜来たって感じがします〜」

「そこまで言ってもらえると嬉しいなあ。腕によりをかけて作ったかいがあつたわ」

かすかに照れながらも二才は、自身ありげに何度もうなずいている。

「それじゃ〜、今回の〜代金は〜これ〜で〜」

シェリーはふところから出したのは、小さな瓶だった。

少し警戒をしながらも受け取った二才は、ふたを開ける前に銘柄を確かめる。

「今回はどこの香水なの？」

「フェアリーの〜住む〜森に〜か生息しな〜いと言われ〜ている、フェアリーテイルと

い〜う花の香水で〜す。今回は〜これで〜」

渡された瓶のふたを開けると、甘いバニラの匂いとサクラの匂いが混じったような、か

いだことのない匂いだった。ただ、その匂いだけで店の中は、春独特の木漏れ日を独占し

たような暖かい雰囲気包まれていく。

「いい香りだね。ありがとうシェリー。また次を楽しみにしてるからね！」

「こちらへもです、じゃあまた会う日まで」

お互い小さくお辞儀をする。シェリーはニンジンの入った段ボールを抱え、オートエー

ガンを後にした。

「なんだか変わった匂いの香水だね。いい香りだけど」

そばにいたシェラが声をかけると、二才は気合を入れてVサインをした。

「うん、今回は当たりだった！」

「当たり？」

わけがわからず首をかしげるシェリーに、二才はクスクスと含み笑いをする。

「シェリーは毎回ここで食事をするたび、代金の換わりに珍しい香水を置いていくのよ」

「へえ。さすが行商人ね」

「ただ、珍しいのといい香りなのは別問題なのよ。珍しいだけで匂いは尋常じゃなかったりもするわけ」

「それで当たりはずれがあるってわけか……」

あごに手をやりつつ納得するシェラのそばで、二才は何度もうなずく。

「以前、世界で一番臭いといわれてるレフラシアンっていう花の香水を持ってきたの。開

けた瞬間に鼻の奥を突き刺すような臭いがしてね。しかも店内にその臭いが染み込んだんじゃ

ったから、臭いが消えるまでの三日間、臨時休業にしたこともあったんだよ」

苦笑するシェラに、臭いを思い出したのか首をブンブンと振る二才。

「その時の香水まだ持つてるけど、シエラも嗅いでみる？」

「遠慮しとく……」

二才の勧めに即答すると、シエラは裏のキッチンへと逃げていった。

元の空き地へと戻ると、マックスが店の中央で暇そうにしていた。回りのお客さんは先

ほどよりも減っているが、商品の数も減っているものでそれなりには売れているらしい。

「マックゝスさん、ご苦労ゝさまゝ」

「もう帰ってきたの？ 一時間とか言ってたのに三十分もたってないぞ？」

「二ゝ才さんの厚意にゝよりゝ、短時間ゝですみゝました」

マックスに深々と頭を下げてから、シエリーは段ボールの中の二エンジンを幌馬車の馬に

やる。馬は喜んで二エンジンをほおばっていった。

軽く馬の鬣を撫でてから、シエリーは幌馬車の中から一つの陶器の壺を取り出していた。

リング大の大きさの白い陶器に、植物のつたのような模様が描かれている。

「お礼にゝこの壺を……」

「くれるのか！？」

「いいえゝ、一回だゝけ使わゝせてあげまゝす」

壺の口を塞いでいた蓋をあけると、マックスの方へと向けた。

「このゝ壺の中ゝに自分のゝ願いを言うゝと、一晩だけゝですがゝ叶うんですよゝ」

「願いつて、どんな願いでもいいの？」

「もちゝろんです！ さあ、願いつてをゝ言つてくだゝさい」

壺を持ったままシエリーは、マックスを凝視していた。それでもマックスは首をかしげ

るばかりだ。

「なんだか、うさんくさいなあ」

「そんなこと、ないです！　ぼくも毎日、使ってるんですから」

「シェリーも使ってる？　ってことは、何回でも使えるんだ」

マックスの問いに、シェリーはそつと微笑んでから頷いた。

「一度くしか使えないなら、マックスさんにくは使わせくませくん」

「そりゃ、そうかもしれないけど」

「さあ、はやく願いを」

壺をマックスの前へと差し出す。マックスは一度咳払いをしてから、キョロキョロと辺りを見回した。

「こ、ここで言うのか？」

「だいじょくぶです」。だれくも聞いてないし、壺にく口をつけて言えばく周りくには聞こえまくせんから」

「じゃあせつかくだから、使わせてもらおうかな」

シェリーから壺を受け取ったマックスは、口をつけてなにやらぼそぼそとつぶやく。

すると白かったはずの壺の色が、ピンクがかった赤色へと変化していった。

「はいく、ごくろうさま」

マックスから壺を受け取ると、ふたを閉めて幌馬車の中へと戻した。

「それくじゃあ、今夜をく楽しみにしてて」

「今夜つて、何時ぐらいになるんだ？」

「日がく暮れてからでくすかね」

首をかしげながら、答えるシェリー。そこまで聞くとマックスは納得したのか、

「次に会つのを楽しみにしてるから、シェリーも商売頑張つてね」とだけ言つて去つていった。

「はい、ありがとうございます」

シェリーが手を振りながら見送ると、マックスは早くもめばしい女性に声をかけていた。

その6：タイフーンシェリー

夕方になると、お客さんだけでなく売り場に並んでいた商品もまばらになっていった。

赤い日光がウオルガレンの滝にあたってキラキラと反射するのを、シェリーはボーっと

眺めていると、空き地を囲んでいる木々を木枯らしが揺らし、シェリーの顔をなぞって去っていった。

「さうて、そろそろ店じまういですかね」

馬車の中からラッパを取り出すと、三度目の快音を響かせる。

『パラパラッパッパッパッパ、パッパパパパーパ』

三度目のラッパは閉店の合図だ。

シェリーは残った商品を幌馬車に積みなおし、空き地を元の状態へと戻していく。

手馴れている作業なので、さほど時間はかからなかった。

キレイに幌馬車の中の整理を済ますと、馬を軽くムチでたたく。

「では、しゅっぱーっ！」

幌馬車が空き地をゆつくりと後にし、来た時と同じマスカーレイドの検問へと向かった。

「ノルンさーん、なにも問題起こしませんでしたよ」

「ああ、帰るのか」

ノルンは口をへの字に曲げており、来た時と同様にあまり歓迎されてはいないらしい。

「どうしたんです？ おなかでも、痛いんですか？」

シェリーの問いに答えず、めんどくさそうにあごひげを撫でる。

「あまり頻繁には来るなよ。こっちはこっちで大変なんだ」

「失礼ですよ。ぼくたち商人は自由に商売をしてくいていいはずですよ」

「来るなどと言っていない。ただシェリーの扱う商品は、あくの強い

ものが多すぎる」

「どういゝう、意味ですか？」

「そのまんまの意味だ」

シェリーは首をかしげてから、口をブクーツとふくらましていた。
「納得いかゝないけど、まあゝいいゝや」

来た時と同じような言葉を残し、シェリーはマスカレードを後に消えていった。

「ふう、これから忙しくなるな……」

ぼやくノルンの横へと、数人の自警団員が走ってくる。シェリーの監視を任命されたハリアーの部隊だった。

「団長！ ただいま戻りました」

「ご苦労」

互いに敬礼をかわすと、ハリアーが報告を始める。

「特に変わったようすはありませんでした。なにも問題らしい問題も起こってませんし被害にあつたという報告も聞いておりませんが……」

口を濁しているハリアーの頭を、ポンと軽く叩く。

「シェリーのあだ名、知ってるか？」

「いえ……」

「タイフーンシェリーだ。すぐに電話が鳴り止まなくなるぞ」

「はっ？」

「他の部隊は全員ここに集まるように言ってくれ。ハリアーの部隊はここに残り、通行証確認と電話番号だ。いいな？」

「はあ……」

わけもわからず事務所へと入り、ノルンの命令を他の部隊へと伝える。

ため息混じりにイスへと座ると、事務所内に電話の音が鳴り響いた。

「はい、こちら自警団事務所」

「あ、あの！ さつきシェリーの店で買ったコシヨウを料理で使ってたら、とつぜん料理

が爆発しちゃって！ 家が火事なんです、助けてください！」

「りよ、了解しました！ 住所とお名前をお願いします！」

事務所に備え付けられた苦情や抗議をまとめる紙に、ザッと住所と名前だけ書くと、その下に火事と殴り書きをする。

「団長！ 大変です！」

ハリアーが事務所の外に行くと、団長よりも先に第三部隊長がハリアーの手から紙をくすねる。

「住宅街、シャルローネさんの家が火事だ。行くぞ！」

第三部隊長が命令を下すと、部隊員は全員足早に去っていった。

呆氣にとられているハリアーの後ろでは、自警団事務所に備え付けられている三台の電話機が、協力してトリオを奏でている。

「いつたい、なんだってんだ！？」

ぼつりとつぶやいた後のハリアーは、部下二人と電話機につきつきりになってしまった。

「取っ手が二つついたコップ買ったんですけど、一つすぐ取れちゃって……シェリーと連絡取れませんか？」

「シェリーから買った二股のコップだと思うんですけど、子どもに使わせたらどっちが

どれだけ飲んだかケンカになっちゃって……」

少しずつ苦情は、シェリーとはあまり関係のない愚痴へと変化していったが、それを無

碍にできないのも自警団のつらいところだ。

「タイフーン 来た時だけでなく、過ぎ去った後も復旧が大変なことか……」

二時間後、ようやくひと段落ついた電話機の前に、ハリアーは苦笑いを浮かべるしかなかった。

その7：マックスの悲劇

マスカーレイドがようやく平穏を取り戻し始め、夜特有の静けさに見舞われる頃、静かに

行動を再開した男がいた。マックスである。

「シェリーの話だと、日が落ちた後に願いが叶うって言うてたからな……」

シェリーと分かれた後、数人の女性にマックスは声をかけていたが、めぼしい結果は得られていなかった。

だからこそ余計に日がくれるのが楽しみになり、家で仮眠を取ってきたのだ。

マックスの願いはただ一つ　マスカーレイド全ての女性に愛されたい　だった。

本当なら世界中の女性にと言いたいところだったが、一晩だけでは相手にできる女性の

数はたかが知れている。その上、わざわざ一晩のために世界中の女性がマスカーレイドに

集まるとなると一つの事件に発展しかねない。

ゆえに、マックスはマスカーレイド限定で願ったのだ。

「さてさて、マスカーレイドの子猫ちゃん達は、どんな反応を見せるのかな？」

わざと目立つように道の真ん中を歩き、すれ違う女性には笑顔で手を振ってあげる。

だが、マックスに対する反応はいつもと変わらなかった。過剰に反応する女性がいるわ

けでもなく、とつぜん告白されるなんてイベントもない。

「どういうことだ、まさかシェリーに騙された？」

ポロツと口から漏れた愚痴を、大きく首を振って打ち消す。

マックスにとって女性を疑うなど恥ずべき行為なのだ。

「よし、オートエーガンにでも行ってみるか！」

ダッシュでオートエーガンまで走り、閉店まじかのオートエーガンへと元気よく入っていった。

「やつほー、二オちゃん元気？」

店内には客はだれもおらず、二オとシェラの二人は店内の清掃と明日の準備に取り掛かっていた。

カウンターの後ろで二オがコップをふき、シェラはモップで床を拭いている。

「なんだ、マックスか。めずらしく来ないと思ってたのに、新時間の差攻撃？」

「攻撃なんて失礼な。おれは二オに愛を届けに来たのさ」

「はあっ？」

頭の横で指を回転させながら、二オはシェラを見やる。

シェラはモップを一時中断し、口元に手をやって小さく咳き込んでいた。

「二オがおれに会いたいんじゃないかなあって思って、こうして来てあげたのさ」

「はあ、そうなの……」

「会いに行こうとか、考えてたでしょ？」

首をかしげて少し考えた後、二オはポンと手を打った。

「そうそう、今から会いに行こうと思ってたのよ。ちょうどよかったわ」

「だろ！？そうじゃないかなって思って、こっちから来たってわけさ」

うんうんと首を何度もうなずかせるマックスに、二オは右手を差し出していた。

「昨日無理やりツケにしたコーヒー代、持ってきたんでしょ？」

頷いていたマックスの頭が、ピクツと一瞬痙攣してから止まった。

「い、いや、そうじゃなくて、あれ？」

「言つとくけどね。ツケのあるうちは注文を受け付けないからね。早いとこ払つてよ」

カウンターから裏のキッチンへと消えようとする二才を、慌ててマックスは止めた。

「そうじゃなくて、おれに対する愛情とか、そういうのない？」

「はつきり言つて、ない！ あんまりしつこいと嫌われるよ」

へなへなと膝の力が抜け、マックスは床に尻餅をついていた。

「どうしちゃったのかしら……いつもと違うけど」

首をかしげながらも、二才はそのままキッチンへと消えていってしまった。

「ねえ、大丈夫？ なにかあったの？」

呆然としているマックスに、シェラが歩み寄り声をかける。

顔を上げると、心配そうにしながらも、うつすら微笑むシェラの顔。

マックスは突然ガバツと立ち上がると、シェラの両肩をがっしり掴んでいた。

「へっ、な、なに？」

「シェラ、おれのことどう思ってる？」

「え、そ、そ、そ、それは……」

シェラの顔が茹蛸のように真っ赤に燃え上がり、全身がブルブルと震え出す。

「おれのこと好きだよな、好きだと言ってくれ！」

「あ、あの、その、わ、わたし！」

シェラが意を決して肯定しようとしたとき、マックスから漏れてはいけない言葉が出てしまっていた。

「女気のかけらもない女でもいいんだ。おれは女性に騙されたとは思いたくない。どうせ一晩だけなんだ。シェラ一人でも十分さ！」

「一晩、だけ？」

一瞬にしてシェラの顔色が蒼白へと変わっていき、体の震えも緊張というより、怒りで震える重々しさが現れて出した。

「わたしが……」

放心状態で開かれていた右手へと、次第に力が込められていく。

「わたしがアンタを好きになるわけないでしょ！」

「ぎゃあう！」

不意を突かれたマックスは、パンチの衝撃でふらふらとよろめきながら、椅子のひ

とつへと突っ込んでいった。激しい衝撃音とバラバラに散らばる椅子。

「うつつ、シェリーめ。まんまとだまされちゃった……」

薄れゆく意識の混濁にあらがうこともできず、マックスは店の中で伸びてしまった。

「な、なによ今の音！」

キッチンから出てきた二才に、シェリーが事情を説明する。

二才は何度か相槌を打ちつつ最後まで聞くと、シェラのポケットを指差した。

「シェリーからもらったお守り、持ってるんでしょ？」

「持ってるけど……」

「マックスの方から求愛してくるなんて、さっそくご利益があったんじゃないの？」

「そっか、しまった！ 告白されるなんて初めてだったから、つい……」

「ついでパンチを放ってるようじゃ、二人の恋愛は前途多難ね」

頭を抱えるシェリーに、二才がくすくすと微笑む。

「でも、一晩だけって言うんだよ？ そんなのひどくない？」

シェラが思い出したように訴えると、首をかしげながら、

「うーん、それはひどいかなあ」

「でしょ！」

あっさりと肯定する二才。だが、涙目のシェラを前にすぐさま意見を付き足していた。

「でも、あまり期待しないほうがいいと思うよ。わたしにもさっき

まで声かけてたし、な

んせシェリーが来た後だからね」

「どういうこと？」

「モテる薬とか、相思相愛になれるお守りなんか売ってたんじゃないの？ 珍しい物は

多いけど商品にあたりはずれが激しいからね。香水と一緒にだよ」

ポケットから今日もらった香水『フェアリーテイル』を取り出して、ゆっくりと顔の前

で回す。

「やっぱり今回は当たりね。今までで最高級の香水だよ」

満足げに香りを堪能すると、二才は再び香水をポケットにしまった。

「じゃあ、このお守りも偽物だつてこと？」

「そうじゃなくてさ、過度の期待は禁物だつて言ってるのよ。それに恋愛なんてお守りな

んかに頼るもんじゃないでしょ？ 自分で道を切り開く努力のほうがいいのはずよ」

ほおーと感嘆し、シェラが何度もうなづく。

「なんだかわたしよりも、二才のほうが大人みたい。尊敬しちゃうなあ」

「なにいつてんだか。じゃあ早速だけど、これどうにかしてよね？」

「これ？」

聞き返してくるシェラに対し、二才はおもむろに床を指差す。

そこにはいまだ意識を取り戻していない、マックスの姿があった。

マスカレードを後にしたシェリーは、また新たな商品を探すために旅に出ていた。

「ハイヨ、シルバ」

浮かれつつ馬を走らせて、街道沿いを進んでいく。

商品を積んでいない馬車はスピードも速く、シェリーはご機嫌だ

った。

やがて日が暮れると、風は次第に冷たさを増していった。暗黒の世界に包まれる夜に馬

車で走るのはあまり利口な選択ではない。

「さうて、今日はこの辺で野宿ですかね」

目立たない森の中へと入ってから馬車を降りると、薪を利用し火をつける。

普段はあまり野宿をしないシェリーではあったが、どうしても宿が見当たらないときと

馬車にほとんど商品を積んでいないときは別だ。

「ふあゝあ、今日も疲れました」

まぶたをこすりながら馬車へと戻り、寝袋や枕といった寝具を取り出す。

一緒に持ってきたのは、睡眠とはほど遠い意味不明の陶器の壺だ。「あれ？」

持ってきた陶器の壺を見て、シェリーは首をかしげた。いつもは白いだけで光もしない

壺が、いまはピンクがかった赤色に光り輝いている。

「ああ、そうでした。マックゝスさんに一晩貸したんでした」

今日は普通に寝ましょ」

馬車から持って降りた壺を元に戻し、シェリーは寝袋の中に身を入れる。

「マックゝスさん、きつといまごろ良い夢見てますね」

夢見心地で微笑んでいるマックスを想像し、含み笑いを漏らす。

お客さんの喜びが自分の喜びであるシェリーにとって、今日はとても満足な一日だった。

その頃、シェラの背中に背負われて家まで連行されるマックスは、マスカレード中の

女性に愛され、街一番の美男子としてパーティーに招待される夢を見ていた。

もちろん、シェリーの壺の効果だとは知る由もない。

＼END＼

その7：マックスの悲劇（後書き）

こんにちわ。水鏡樹です

『マスカーレイドに異常なし！？ 第二話 行商人シェリー』いかがだったでしょうか？

今回はシェリーという行商人を主人公に、マスカーレイドの人々の魅力を出したつもりです。

うまくいったでしょうか？

今後ともマスカーレイドに異常なし！？はシリーズとして続けていくつもりです。

よろしければ、また覗いてください。マスカーレイドの人々の活躍が、また増えているかもしれません。

それでは、最後まで読んでいただき、本当にありがとうございます。暇があれば、評価もぜひお願いしますm（＿）m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5955a/>

マスカレードに異常なし！？ 第2話 行商人シェリー

2010年10月11日19時51分発行